

資料館だより

第 49・50 号

合併号

平成 20 年 (2008) 10 月 25 日

編集・発行 市立歴史民俗資料館 〒208-0004 東京都武蔵村山市本町 5-21-1 TEL 042 (560) 6620

ホームページアドレス <http://www.city.musashimurayama.tokyo.jp/shiryokan.html>



国土地理院発行 昭和 22 年撮影

特別展 “武蔵村山の戦争遺跡”

武蔵村山市教育委員会では、平成 19 年 7 月、市内に軍事施設があったことを後世に伝え、世界の恒久平和を祈るため、東京陸軍少年飛行兵学校跡地を市の文化財（旧跡）に指定しました。

市内の軍事施設はこれ以外にも、所沢陸軍航空整備学校立川教育隊（それ以前は陸軍東部七八部隊（高射砲第七連隊）＝現村山医療センターほか）や村山陸軍病院（現東京経済大学グラウンド）などがありました。

これらの施設は立川陸軍飛行場（現陸上自衛隊立川駐屯地及び昭和記念公園等）を中心とする大規模な陸軍航空施設の一部で、昭島市の昭和飛行機や福生・立川・昭島・羽村・瑞穂・武蔵村山各市町に跨る多摩陸軍飛行場（現米軍横田基

地）なども含まれ、大規模な爆撃を受けた東大和市の日立航空機立川工場もその一つでした。

歴史民俗資料館では、市内に所在した軍事施設等の戦争遺跡を広く紹介し多くの方々々に改めて戦争と平和について考える契機としていただくため、この特別展を開催しました。

展示の対象とした軍事施設等は、「東京陸軍少年飛行兵学校」「陸軍東部七八部隊（高射砲第七連隊）及び所沢陸軍航空整備学校立川教育隊」「村山陸軍病院」の軍事施設と、以前から確認されていた「三ツ木地区防空壕」、発掘調査で確認された「大ヌカリ地区防空壕・向山遺跡・久保遺跡」で、その他に「昭和 20 年 4 月 2 日・4 日の空襲被害状況」についても触れています。

武蔵村山周辺の戦争遺跡とその歴史

武蔵村山周辺の軍事施設は、立川陸軍飛行場開設に始まります。この飛行場は帝都（東京）防衛構想の航空部隊の中核拠点として位置づけられ、関東大震災前年の大正 11 年に開設、陸軍第五飛行大隊（後、陸軍飛行第五連隊と改称）が駐屯しました。

当初は官民共用の飛行場で、東京（立川陸軍飛行場）－大阪間、東京－大連間の旅客線も運行していましたが、旅客輸送などの民間部門は昭和 6 年に完成した東京飛行場（現東京国際空港＝羽田空港）に移転を開始し、移転が終了した 2 年後（昭和 8 年）に、名実共に陸軍専用飛行場となりました。この移転は、昭和 6 年に関東軍が南満州鉄道を爆破（柳条湖事件）して起こった満州事変の影響が大きく、翌年 4 月には中国大陸に向けて陸軍飛行第五連隊が出動しています。

この間、立川陸軍飛行場周辺には、所沢から陸軍航空本部技術部が移転、石川島飛行機製作所（後、立川飛行機と改称）が設立されています。そして、昭和 7 年には、村山村に大規模な陸軍飛行第五連隊の射爆場（現武蔵村山市大南地区）が完成しました。

同じ年に五・一五事件が起こり、翌年には 3 日間にわたり「第 1 回関東防空大演習（帝都防衛）」

武蔵村山周辺の戦争関係年表

年号	西暦	出来事	
大正	11	1922 立川陸軍飛行場開設、陸軍第五飛行大隊が駐屯	
	12	1923 9月、関東大震災	
	14	1925 陸軍飛行第五連隊に格上げ	
昭和	3	1928 陸軍航空本部技術部（後、陸軍航空技術研究所）が立川に移転	
	5	1930 石川島飛行機製作所が設立	
	6	1931	東京飛行場（現羽田空港）が完成
			9月、満州事変
	7	1932	飛行第五連隊が中国へ出動
			陸軍飛行第五連隊射爆場が村山村に完成
			五・一五事件、犬養首相暗殺
	8	1933	8月、第 1 回関東防空大演習
	9	1934	陸軍航空本部補給部（後、立川陸軍航空支廠）が立川に移転
	11	1936	二・二六事件
12	1937	「神風号」、東京－ロンドン間飛行	
		7月、盧溝橋事件、日中戦争勃発 昭和飛行機が設立	
13	1938	4月、国家総動員法を制定	
		陸軍飛行第五連隊が柏に移転	

昭和	13	1938	第五連隊射爆場跡地に、東京陸軍航空学校校舎が完成
			陸軍飛行第五連隊跡に、陸軍航空技術学校が移転
	15	1940	多摩陸軍飛行場が完成
			陸軍航空工廠が設立
			村山村に東部七八部隊が移転
	16	1941	村山陸軍病院が設立
			12月、太平洋戦争が起こる
	17	1942	4月、東京、米陸軍機に初空襲
			6月、ミッドウェー海戦
			陸軍航空審査部が開設
	18	1943	東京陸軍少年飛行兵学校と改称
			東部七八部隊跡地に、所沢陸軍航空整備学校立川教育隊を開設
			村山・山口貯水池堰堤補強工事
			山口貯水池に高射砲部隊を配置
	19	1944	6月、マリアナ沖海戦
			中島飛行機が空爆され、多摩地区への空爆が始まる。この頃、三ツ木・大ヌカリ地区に防空壕を掘る。
	20	1945	日立航空機立川工場が空爆される
			4月2日、武蔵村山最初の空爆
			4月4日、武蔵村山2度目の空爆
			向山地区に高射砲用探照灯を設置
久保地区に大型地下坑を掘る			
8月、八王子空襲			
8月6日、広島に原爆投下			
8月9日、長崎に原爆投下			
8月14日、ポツダム宣言を受諾			
8月15日、昭和天皇の玉音放送、太平洋戦争が終る。			

が陸軍飛行第五連隊も加わって実施されるなど、“非常時”といわれる軍事色の強い状況が加速されていきます。そして、昭和11年の二・二六事件を経て、翌年の盧溝橋事件勃発によって、日中戦争へと突入していきました。

陸軍立川飛行場周辺も、昭和9年には航空本部補給部（後、立川陸軍航空支廠と改称）が移転、昭和11年に大軍拡予算が成立してからは、広大

な立川飛行機砂川工場を建設、翌12年に立川飛行場の西に自前の飛行場を持った昭和飛行機、昭和13年に東京瓦斯電気立川工場（翌年、日立航空機に改称）などが設立されました。

昭和13年には、陸軍飛行第五連隊が千葉県柏に移動し、立川陸軍飛行場には実戦部隊がいなくなりました。その年の8月、第五連隊移転により空地となった射爆場に、東京陸軍航空学校校舎が完成し、村山でも少年飛行兵の基礎訓練が始まりました。

昭和15年には、立川飛行場の付属施設として陸軍多摩飛行場が建設されました。この飛行場内には前年独立した陸軍飛行実験部（後、審査部が独立して陸軍航空審査部が創立）が移転しており、新しい飛行機の性能実験をするための試験場の役割を持つ飛行場でした。

同年、村山村の東京陸軍航空学校の北（現村山医療センターほか）に陸軍東部七八部隊（高射砲第七連隊）が駐屯し、訓練場として使用していました。駐屯期間は約3年間で、昭和18年には北方戦線へ移動し、アッツ島で玉砕したと伝えられていますが、詳細は不明です。東部七八部隊の西に隣接して、昭和16年10月には、近衛師団司令部直轄の二等陸軍病院として、近隣陸軍施設の傷病兵を収容することを目的に村山陸軍病院が開設されました。

昭和16年12月、日本海軍の真珠湾攻撃と日本陸軍のマレー半島上陸により、太平洋戦争が起こります。しかし、翌年4月には東京が米陸軍機に初めての空襲を受け、6月には海軍がミッドウェー海戦で敗北、戦局は一気に不利となりました。

昭和18年10月、戦局悪化の中、東部七八部隊跡地に所沢陸軍航空整備学校立川教育隊が開設され、それ以前の3月には陸軍少年飛行兵学校令の公布により、東京陸軍航空学校は東京陸軍少年飛行兵学校へ改称されました。この年には、村山・山口両貯水池堰堤を空爆から守るための耐弾層工事を開始しますが、そのために、羽村-村山間の軽便鉄道の軌道を再利用しています。また、12月には山口貯水池畔に防空第六連隊独立高射砲第二大隊を配置するなど、本土決戦の様相が強

なくなっていました。

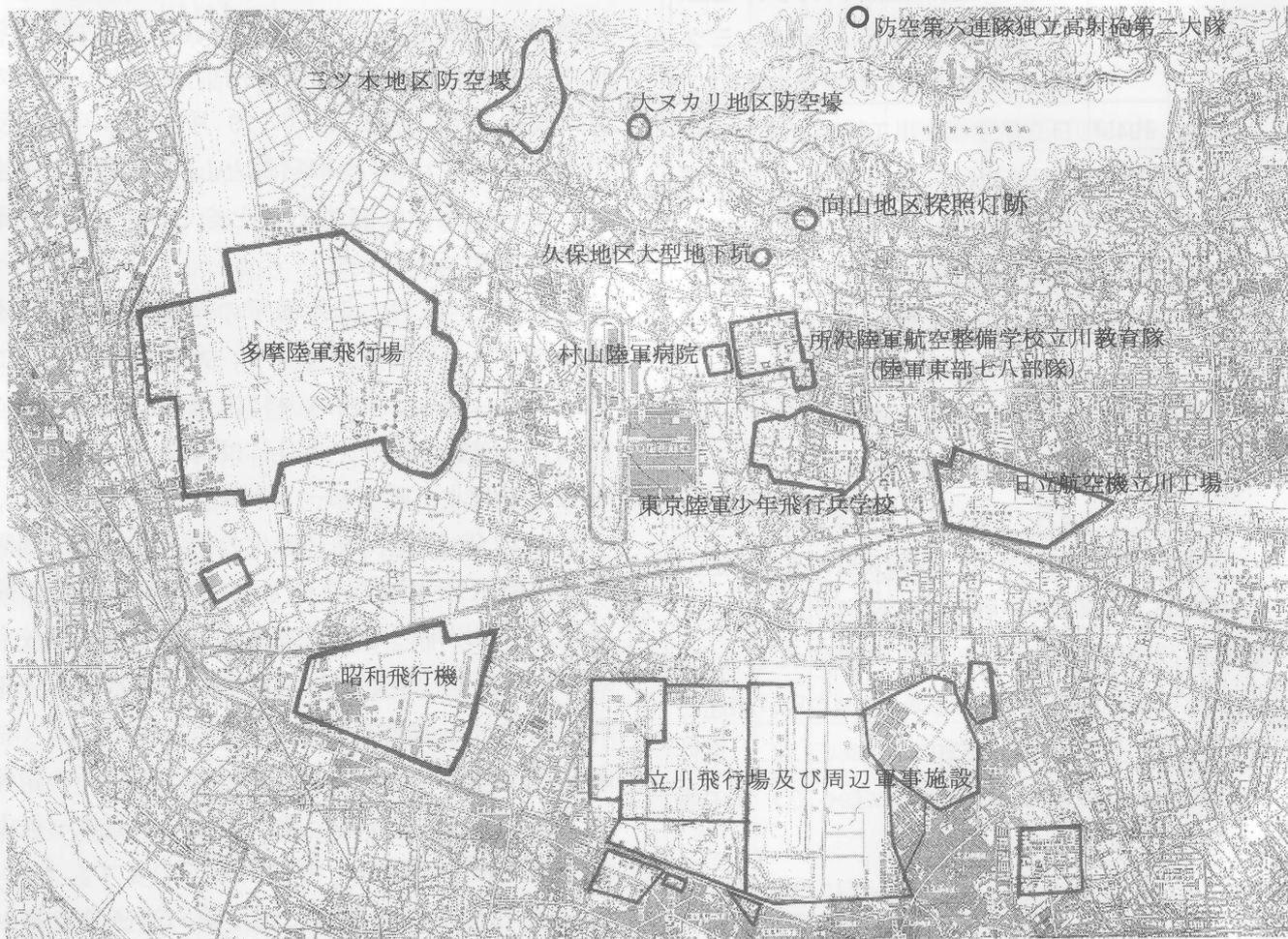
昭和 19 年、マリアナ沖海戦でサイパン島などを米軍に奪還された後は、昭和 20 年 3 月の東京大空襲に代表される B29 爆撃機などによる日本本土への空爆が激しくなります。3 月からの沖縄戦と 6 月の沖縄島民集団自決、8 月の広島・長崎への原爆投下などを経て、ポツダム宣言の受諾、そして、8 月 15 日の昭和天皇「玉音放送」によって、太平洋戦争の敗戦が告げられました。

多摩地区への空爆は、昭和 19 年 11 月 24 日の B29 爆撃機 111 機による中島飛行場武蔵製作所が最初で、中島飛行場に対しては終戦までに計 16 回にも及んでいます。昭和 20 年 2 月には日立航空機立川工場が艦載機による爆弾と機銃掃射の空爆にさらされ、その後 2 回の空爆で、ほとんどの建物が破壊されました。立川飛行場周辺への空爆も激しく、昭和 20 年 2 月の空爆を最初に、計 10 回の爆撃が行われていました。多摩地区の最大の被害は 8 月の八王子空襲で、犠牲者約 450 名、負

傷者 2,000 名、旧市街地の 80% を焼失しました。多摩地区への空爆は終戦日の 8 月 15 日未明まで行われ、被爆地は奥多摩町大丹波地区で、伊勢崎市と熊谷市を空爆した帰りに爆撃したようです。「多摩地区の空爆犠牲者を確認調査する会」が平成 12 年まで確認調査した結果では、多摩地区の犠牲者は 1,540 名を数えるとのことでした。

武蔵村山市内の空爆は、4 月 2 日と 4 日の 2 回であったようです。2 日は中島飛行機武蔵製作所を空爆した後の午前 2 時過ぎの爆撃でしたが、死傷者はありませんでした。4 日の空爆は午前 1 時過ぎで、立川飛行機を爆撃した後、東京陸軍少年飛行兵学校や馬場地区などに爆弾が投下され、死者数は 9 名で、怪我人も多数ありました。

都立野山北・六道山公園内の三ツ木地区には、多摩陸軍飛行場内の航空機燃料などを保管するために作った防空壕と思われる横穴が 76 基確認されています。中島飛行機爆撃に危機感を感じた陸軍によって掘られた可能性が高く、武蔵村山の



武蔵村山周辺の戦争遺跡配置図 (楢崎茂彌氏作成図を元に加筆)

空爆もこの防空壕を狙った可能性があります。また、発掘調査によって、神明ヶ谷戸の向山地区から高射砲用の探照灯を設置した跡が確認され、さらに久保地区からは通信施設と思われる大型地下坑が発見されました。当時を知る方は「武蔵村山の空爆後に急遽設置された」と証言されています。歴史民俗資料館周辺の大ヌカリ地区からも軍用と思われる防空壕が2基発見されており、

市内に残る戦争遺跡の概要

<東京陸軍少年飛行兵学校>

東京陸軍少年飛行兵学校（当初名は東京陸軍航空学校）は、昭和12年（1937）に開校された陸軍航空兵の養成学校で、現在の武蔵村山市大南三・四丁目近辺に所在していました。建物は現在残っていませんが、かつて少年飛行兵学校の正門があった場所には、「東航正門跡」碑が、学校跡地の一画には「揺籃之地」碑が建てられています。

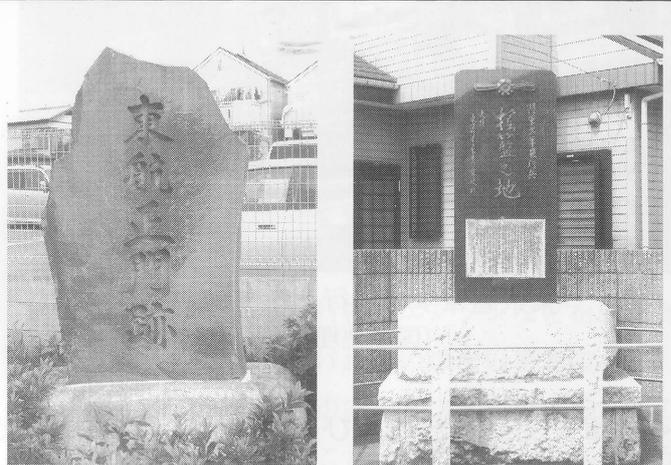
第1次世界大戦では、戦車や航空機といったそれまでの戦争にはなかった兵器が登場したことから、旧日本軍においても飛行兵の養成は急務となり、当時の陸軍は少年航空兵の教育を始めました。

昭和9年（1934）、所沢陸軍飛行学校に少年航空兵の一期生が入校し、昭和12年10月には熊谷陸軍飛行学校内に「東京陸軍航空学校」が仮設ながら開校されました。翌13年8月に村山村中藤（現在の武蔵村山市大南）に新校舎が完成し、同年9月に移転してきました。昭和16年（1941）に太平洋戦争が始まり、昭和18年3月に陸軍少年飛行兵学校令が公布され、この時、東京陸軍航空学校は名称を「東京陸軍少年飛行兵学校」と改めました。この学校に入学するには小学校高等科を卒業した満14歳から17歳までの者とされていました。授業の科目は、午前中が国語・数学や兵器学など、午後は軍事教練などの術科と体操でした。また、学校北側の練兵場では、グライダーを使った滑空訓練も行われていました。これら一年間の課程が修了すると、適性検査の後、操縦・整備・通信の各分野に分かれた二年間の上級学校に進みました。卒業後、全国の飛行隊に配属となりました。ここ

航空燃料等が保管されていたようです。

陸軍は、立川飛行場を中心に軍事施設や軍需工場を集中させて、「軍都立川」を作り上げました。

「東京陸軍少年飛行兵学校」「所沢陸軍航空整備学校立川教育隊」「村山陸軍病院」などはその一部であり、自ずと武蔵村山も“戦争”に組み込まれ、そのことが空爆被害をもたらす結果になったと言えるでしょう。



「東航正門跡」碑

「揺籃之地」碑

東京のほか、少年飛行兵学校は大津・大分に分校が出来ました。卒業生は46,000名、そのうち4,500余名もの人が、戦死しました。

五日市街道の砂川三番交差点から武蔵村山市に向かい、金毘羅橋を渡った先にV字路があり、東側の道を行くと「東航通り」の道路標識があります。そこから北に300mほど行った砂川七丁目交差点が武蔵村山市と立川市との市境で、交差点の向かって左側道路脇に「東航正門跡」碑があります。そして、この交差点が正門となり、そこから北側一帯の20万坪（約64万㎡）が東京少年飛行兵学校の敷地でした。少年飛行兵学校の本部のあった一角には、昭和38年（1963）、少年飛行兵学校出身者の会による戦没者慰霊碑が建てられました。この慰霊碑は平成2年に岸の禅昌寺に移され、その跡地には同会により「揺籃之地」碑が建てられました。

東京陸軍少年飛行兵学校は、太平洋戦争が終わった後の昭和20年11月26日に廃校となり、敷地は食糧難のため畑に開墾されました。現在

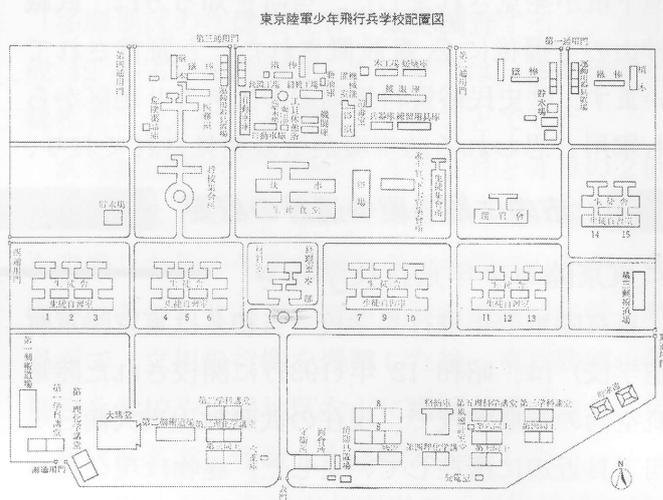
は、住宅地として開発されています。

平成 19 年 7 月 10 日、武蔵村山市教育委員会では市内に大きな軍事施設が存在したと、少年飛行兵学校を卒業した多くの人たちが戦死した



「東京陸軍少年飛行兵学校跡地」
(国土地理院発行、昭和 22 年撮影)

ことを後世に伝え、世界恒久平和を祈るために、その記憶をとどめる二つの石碑が建立されている地を、「東京陸軍少年飛行兵学校跡地」として市の文化財（旧跡）に指定しました。



「東京陸軍少年飛行兵学校校舎配置図」
(「陸軍少年飛行兵史」より転写)

<陸軍東部七八部隊及び所沢陸軍航空整備学校立川教育隊>

陸軍東部第七八部隊

現在、村山医療センター・国家公務員住宅・武蔵村山教育センター・雷塚小学校・雷塚公園・国立小児病院・都立村山養護学校・国立予防衛生研究所等の敷地となっている場所に、太平洋戦争中、巨大な軍事施設がありました。

当時は一面桑畑であったこの広大な土地約 85,200 坪に、昭和 15 年(1940)、陸軍東部第七八部隊（高射砲第七連隊）の兵舎と^{えいてい}営庭がつけられました。高射砲とは、敵航空機の攻撃から自軍を^{まも}護るために作られた^{かほう}火砲のことで、営庭の中央には、高さ 30m の鉄塔が 4 基とその間にはられたワイヤーに模型飛行機を吊るした訓練装置が設置され、高射砲の照準を当てる訓練が行なわれていました。また、敷地の南東には自動車練習場が作られ、高射砲などを移動させる必要からトラックの運転練習も行なわれていたようです。航空写真からもその練習用道路の跡をはっきりと見ることができます。

この部隊は、昭和 18 年(1943)に北方に移動し、その後日本軍とアメリカ軍の激戦地となったアリューシャン列島の^{ぎょくさい}アッツ島で玉砕したと伝えられています。廃隊して東京防衛隊に編入されたとのお

話もあり、詳細は定かではありません。

所沢陸軍航空整備学校立川教育隊

昭和 18 年(1943)、戦局の悪化から、少年飛行兵養成の必要に迫られた陸軍は、少年飛行兵の基礎教育を短縮し短期養成する乙種制度をはじめました。

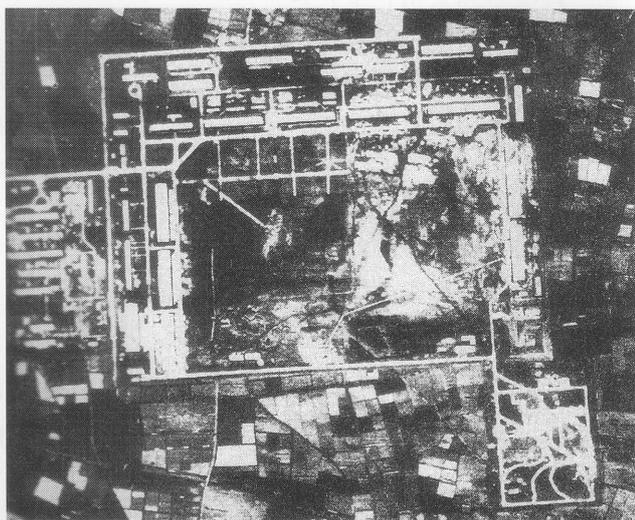
この乙種制度は、従来の甲種制度で行なわれていた基本校とよばれる少年飛行兵学校で学ぶ一年間を^{はぶ}省き、直接、専門教育課程である上級校の操縦・通信・整備それぞれの教育隊に入校、半年間で生徒課程を終了し上等兵となり、更に半年間実科を学び卒業しました。その時点で階級は兵長に上がり、各飛行師団に入隊するという、非常に短期養成のものでした。その為に、所沢にあった陸軍航空整備学校を所沢陸軍航空整備学校（立川・八戸教育隊）と改称・増設し、岐阜陸軍航空整備学校も新たに設置されました。操縦生徒は^{たちあらい}大刀洗陸軍飛行学校、技術生徒は所沢陸軍航空整備学校と岐阜陸軍航空整備学校、通信生徒は陸軍航空通信学校（吉田、尾上、加古川、菊地教育隊）で教育が行なわれました。

所沢陸軍航空整備学校立川教育隊は前述の高射砲部隊跡地に開設され、昭和 18 年 10 月の 15 期生 600 名の入校からはじまりました。年齢は 14 歳から 17

歳の少年達。すでに近くに開設されていた東京陸軍少年飛行兵学校に入学した生徒達には、この立川教育隊の存在は知らされずにいたようです。ここは飛行機を整備する少年兵を育成する学校でした。立川教育隊は4個中隊からなり、それぞれの中隊には4区隊が所属、1中隊150名でした。

ここで、当時の生徒の生活状況を述べてみたいと思います。生徒としての一日は、朝5時半の起床ラッパにはじまり、起床すると駆け足で営庭へ集合。肌を鍛え風邪をひかないための訓練として上半身裸になり、真冬でも健康たわし（亀の子たわし）で摩擦を行ないました。また、消灯から起床時まで、2名1組での不寝番勤務もあり、営舎内の事故防止や起床時の通報、具合の悪い生徒の看病なども行ないました。

生徒手当は一ヶ月4円。酒保（^{しゅぼ}購買部）にはキャラメルくらいしか甘味はなかったようです。冬の休日に白い体操服を着て、区隊で山口貯水池（狭山湖）や丘陵地に出かけて雪の中ウサギ狩りをおこなったりした事もあったそうです。入校した少年たちは、6ヶ月間で、国・数・理化学、材料学、航空工学、

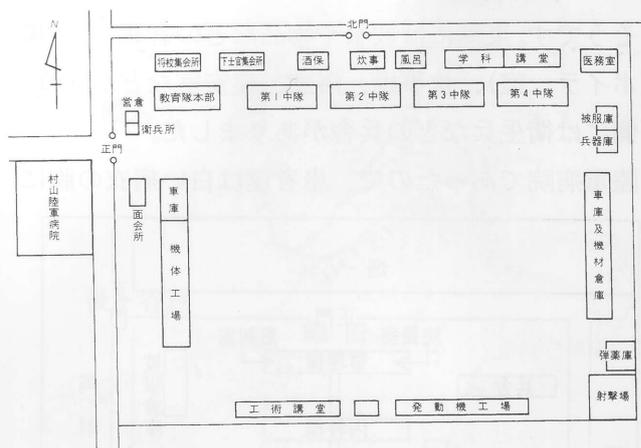


空から見た整備学校と練習用道路（右下）
（「写真集東大和・武蔵村山市・瑞穂町の昭和史」より転写）

製図、兵器学、電気学、^{てんぱんれい}典範令等の科目を習得。その後、リベット打ち、溶接などの工学実習をして、九七司偵・九五式練習機を使つてのエンジン分解、組立、試運転、操作法などの実科教育が続きました。更に月に2・3度は就寝後あるいは早朝の非常呼集等、休む間もない日々が続きました。従来の基礎教育の1/3の期間で教育訓練を終了させるという、短期養成の即戦力となる訓練は大変に厳しいものであったようです。

入校して8ヶ月後には、陸軍上等兵を命ぜられ、通常であれば更に専門教育を受けるところを、実戦機の整備を6ヶ月で教育終了、兵長として前線部隊に配属されました。

昭和20年に入ると更に戦局は悪化し、村山周辺には教育隊の他にも多くの軍事施設があったことから米軍の空襲が激しくなりました。立川教育隊でも、空襲に備えるために飛行機やエンジンなどを教育隊から疎開し訓練をしなければいけない事態になり、砂川村（現立川市）や市内の三ツ木、村山貯水池の山中に飛行機等を隠すことになったようです。こうした中でも教育隊は終戦まで存続しました。



所沢陸軍航空整備学校立川教育隊配置図
（「補遺 陸軍少年飛行兵史」より転写）

<村山陸軍病院>

村山陸軍病院は、昭和16年(1941)10月に近衛師団師司令部直轄の病院として創設されました。面積は約13,500坪で、近隣にある東京陸軍航空学校（後の東京陸軍少年飛行兵学校）、陸軍東部第七八部隊（高射砲第七連隊、移転後の所沢陸軍航空整備学校立川教育隊）、東京陸軍少年通信兵学校（東村山）、

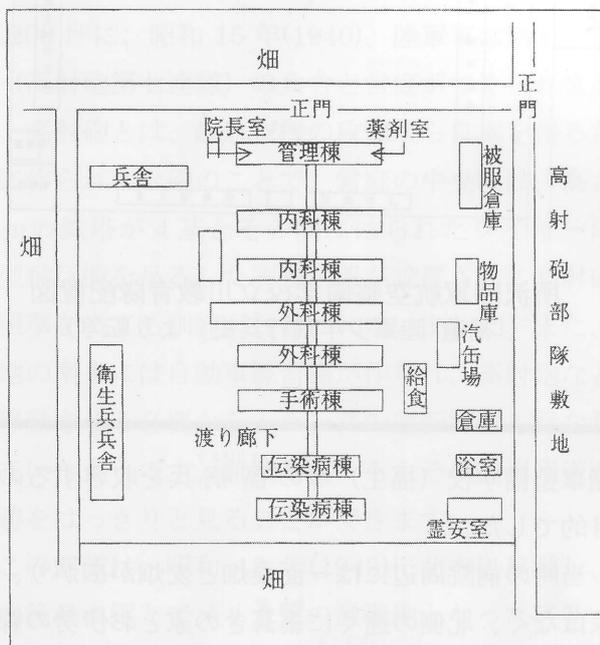
陸軍整備学校（福生）等の^{しょうびょう}傷病兵を收容するのが目的でした。

当時の病院周辺には一面桑畑と麦畑が広がり、人家はなく、北側の遠くに^{むらさき}藁葺きの家とお伊勢の森の木々が見えるだけで、建物といえば隣接する高射砲部隊があるのみでした。冬の木枯らしの季節になる

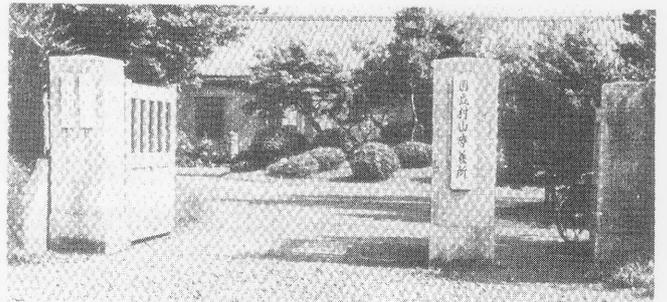
と畑の砂が吹き上がり、病室や廊下等が砂まみれとなり掃除が大変でしたが、春には麦畑からひばりが高く舞い上がり、夏の夕方にはこうもりが乱れ飛び、秋には水溜りに赤とんぼがタマゴを産み付ける様子がみられるなど、のどかな田園風景が広がっていました。交通が不便で、立川駅前から1時間に1本しか出ない超満員の箱根ヶ崎行きの立川バスしかありませんでした。現在のバス停「村山医療センター入口」のあたりに当時のバス停もあり、車掌の「東部七八部隊前」の声で下車。そのバス停から現在の大学通りである、両側に桜が植わっていたデコボコ道を東に進むと病院の正門に着きました。現在も、正門跡は東京経済大学の学生達が通用口として利用しています。

正門を入るとロータリーがあり、北側から管理棟、内科棟、外科病棟、手術棟と続き、2棟の伝染病棟がありました。建物は木造・モルタルの造りで、すべての棟が渡り廊下で繋がっていましたが、この伝染病棟への渡り廊下は他の棟より長くなっていました。伝染病棟には戦地帰りの重い結核患者が多く入院しており、隔離病棟となっていました。医師は彼らの為に、何通もの恩給診断書を発行し病後に備えたそうです。東側には被服や物品などの倉庫、汽缶場（ボイラー室）、炊事場、浴室、霊安室などがあり、西側には衛生兵などの兵舎がありました。

陸軍病院であったので、患者達は白い病衣の胸に



村山陸軍病院配置図
 (「多摩のあゆみ 119号」より転写)

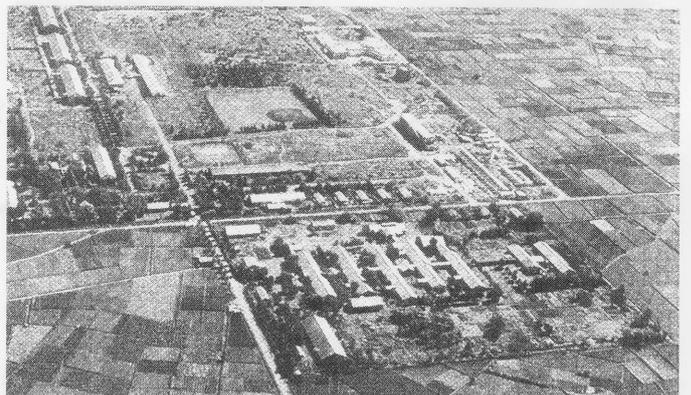


村山陸軍病院正門 (昭和 31 年頃)

階級章をつけ、廊下で会えば敬礼をしなければなりませんでした。毎月 8 日の朝は集会室で勅語奉読式ちよくごほうどくしきがあり、全職員・患者の前で院長が勅語を読み上げました。昭和 20 年には空襲が激しくなり、看護師たちもサイレンと共に出勤し、解除と共に家に帰る様な毎日が続いたそうです。白衣から国防色のモンペ姿となり、防空頭巾と救急箱を背に患者と共に防空壕で過ごす日が多くなりました。そのため、病院では上諏訪の小学校に患者や資材の疎開そかいを始めました。衛生兵も次々と外地に送られ、代わりに京都から日赤救護班八三九の看護婦 20 名が応援に来ました。空襲解除と共に運び込まれる負傷者が多くなり、貯水池周辺の山林をねらう爆弾は時限爆弾と共に村中をゆるがしました。

終戦の日である 8 月 15 日は、病院長以下職員全員が玄関中央廊下のラジオの前に整列して天皇の玉音放送を聞いたそうです。

敗戦により軍は解体しましたが、陸軍病院は引き続き業務を続行し、浦賀港に引揚げて来る南方方面の復員患者や舞鶴港に引揚げて来る北方方面の復員患者などの外地引揚患者の收容治療に当たりました。食料・物資不足を補うため近隣の解体される部隊に出向き、大豆・小豆・高粱こうりやん (モロコシ) や薬品・燃



手前が旧陸軍病院 (昭和 30 年代)
 (国立療養所村山病院「創立三十周年記念誌」より転写)

料などの残り物を集めて倉庫に保管しておくことが日常の業務になっていました。

昭和 20 年(1945) 11 月 19 日、連合軍最高司令部から発せられた「陸軍病院に関する覚書」に基づき 12 月 1 日をもって厚生省に移管され、国立村山病院と改称され、一般の住民の医療機関となりました。国立病院になったと言っても、実情は変わらず、職員のほとんどが軍から引き続いて居残った者ばかりだったので、服装も軍当時そのまま、階級章を取り除いただけのものを着用していました。

昭和 22 年(1947)には、国立療養所村山病院と改称し結核療養所に転換しました。昭和 23 年、所沢陸軍航空整備学校立川教育隊跡ちゅうりゅうに駐留していた進駐軍が移転。昭和 25 年(1950)には病院拡張が決定し、翌年からは旧兵舎と旧陸軍病院を併合して医療行為を続けました。併合したことにより、約 10 万

坪という広大な敷地になり管理が難しくなったため、敷地の広さや立地条件から旧整備学校の敷地に施設の主体を移すことにしました。しかし、旧兵舎をほとんどそのまま使用していたこともあり、患者療養上や道路を隔てた土地の管理の困難などの問題が生じました。そこで、昭和 38 年(1963)末、東京経済大学と村山病院との間で、旧陸軍病院より移管の敷地及び建物と、昭和 26 年(1951)に併合した旧整備学校敷地に大学が建築する外来診療・管理棟・病棟・職員宿舎 5 棟とを等価交換する契約が成立し、昭和 40 年(1965)、現在の場所に移転しました。

現在、国立療養所村山病院は、「独立行政法人国立病院機構村山医療センター」となり、旧陸軍病院の跡地は東京経済大学のグラウンドとして使用されています。

<三ツ木地区防空壕>

武蔵村山市総合運動場のある後ヶ谷戸地区うしろがやと（三ツ木四丁目）には、“防空壕”が谷に面した傾斜地に数多くあります。

平成 5 年度の東京都西部公園緑地事務所の調査報告によりますと、後ヶ谷戸東側斜面に 8 基、細田の谷戸さんぼんいりに 6 基、三本入が最も多く各々の谷戸を合計すると 34 基が設置されています。この三本入あかさかやとの赤坂谷戸とと殿入とのいりの谷戸に挟まれた谷戸には 17 基が穿たれ、後ヶ谷戸の東側に位置するエケ入うがの谷戸に 11 基が確認されています。確認数は、計 76 基となります。

しかしながら、崩落か人為的に埋め戻されたのかは不明ですが、全てが埋没していて一部空洞が確認できたものの、完全に奥まで立ち入れる“防空壕”は皆無だったようで、入口部近くが開口していたものもほぼ半数に止まります。なお、現在はこれらの全てが「東京都立野山北・六道山公園」内に含まれていて、そのほとんどは崩落の危険などの理由で、空洞部には土砂が埋め込まれています。ただし、数基はその存在を後世に伝える意味などもあって、近くから見学が出来るように残されています。

このような状況ですから、76 基全てが防空壕で



三ツ木地区防空壕分布図 (● が防空壕)
 (野山北・六道山公園防空壕跡実態調査
 「防空壕内部平面図」より転写・加筆)

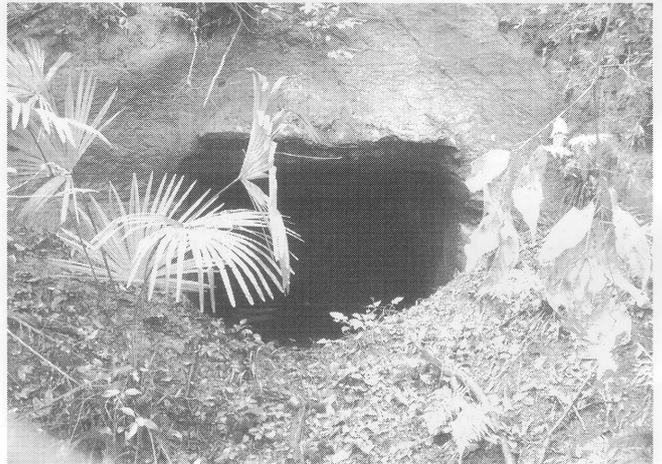
あるかどうかは不明ですが、地中レーザ一探索機などによる調査の結果、そのほとんどが幅 5 m ×

高さ7m前後の台形状もしくは天井ドーム型の断面形を示しており、奥行が10~20mの規模のもので中心で、奥行30mを超える大規模なものまであります。家族用の防空壕が幅1.5m×高さ2m、奥行5m程度ですから、これらの“防空壕”がいかに大きいかが判ります。

古老の話ですと“多摩飛行場の航空機燃料を隠すために、兵隊さんたちが掘っていた”とのこと。近くの谷戸には主翼を外した戦闘機なども隠されていたようですから、陸軍多摩飛行場内の飛行機や燃料などを空爆から避難するための陸軍用の防空施設と考えられますし、その構築時期も中島飛行機武蔵製作所の空爆後であった可能性が高いのではないのでしょうか。

市内狭山丘陵の谷戸斜面部には、この他にも後述する大ヌカリ地区や中村・野山地区に、家庭用

とは考え難い規模の防空壕が構築されています。また、赤坂池奥の谷戸にも戦闘機が隠されていたとの証言もあり、狭山丘陵南麓全域が軍事機器や物資などの避難場所であったのでしょうか。



公園内に残された三ツ木地区の防空壕

<大ヌカリ地区・向山・久保遺跡の戦争遺構>

大ヌカリ地区防空壕

大ヌカリ地区は、第1給食センター北側の東京都水道局敷地内となる谷戸から歴史民俗資料館北側の地区を指しています。その第1給食センターの裏山に防空壕が存在することは以前から知られており、航空機燃料の保管場所ではないかと噂されていました。

昭和61・62年度埋蔵文化財調査の一環としてこの防空壕は調査され、大型防空壕1基と小型防空壕1基を確認しました。平成5年、資料館前の道路（都道村山一所沢線）の拡張工事に伴い、東側傾斜面に大型防空壕が1基確認されて、大ヌカリ地区には計3基の防空壕が掘削されたことが判明しました（右の位置図参照）。

大型防空壕には入口部が二ヶ所あり、その間に主体部が穿たれていて、形態は鋌(カスガイ)状を示します。第1給食センター北の大型防空壕（図I・写真I）については、入口部の規模は東側が[幅2.8m×高さ2m、奥行7.3m、断面形：方形型]で、西側が[幅2m×高さ1.7m、奥行5m、断面形：アーチ型]です。主体部の規模は[幅2.7~1.9m×高さ2.3m前後、全長26.5m、断面形：方形型~アーチ型]です。掘削痕から判断す



大ヌカリ地区防空壕位置図（●塗：防空壕）

ると、全てツルハシによって東入口部から西入口部へ掘り進んだもので、両入口部から掘り進んだものではなさそうです。

防空壕内には、居住用の施設や水抜き等の施設もなく、仕切り用の溝はあるものの全くの素掘り

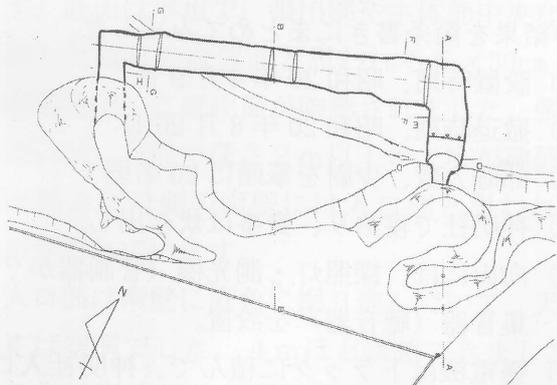


図 I : 大型防空壕① 平面図

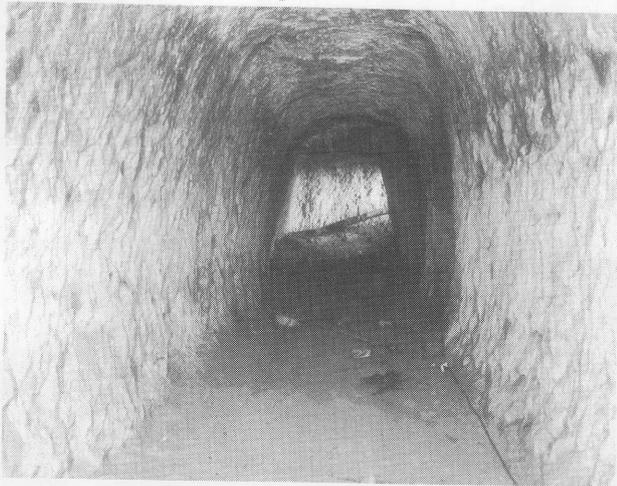


写真 I : 大型防空壕①の内部写真

でした。主体部の規模は、三ツ木地区防空壕の最大級に近い規模であり、噂どおり“航空機燃料の保管場所”の可能性が高いと思われます。

ちなみに、“太平洋戦争終戦直前に、朝鮮の人達を集めて防空壕を掘っていた”との証言があり、その場所は横田地区であったようです。なお、資料館前の大型防空壕も鏝(カスガイ)状の形態ですが、主体部の全長は約 40m を測り、第 1 給食センター北の大型防空壕の 1.5 倍で、かなり大規模な防空壕でした。

小型防空壕(図 II)はまさしく「家族用」の防空壕で、長方形の居住部とその手前に L 字形の入口部が構築されていました。居住部は傾斜面を掘削した範囲で構成しており、[全長 2.9m、幅 1.7m、高さ 2m 前後、断面形がアーチ型]で、約畳 3 枚分の大きさです。境に水抜き用溝を巡らせた通路部分を中央に置き、その両脇に少し高くした腰掛部のスペースを作り、奥には物置用の空間を腰掛部より高めに確保しています。壁面も大型防空壕に比べて丁重に仕上げられていました。

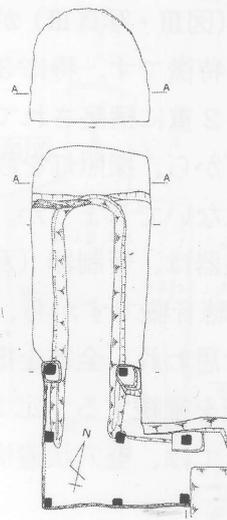
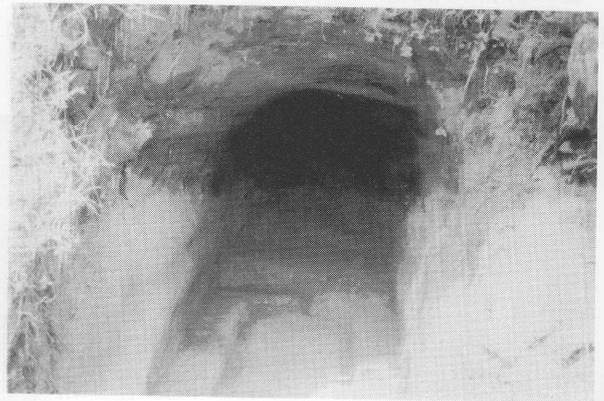


図 II : 小型防空壕

写真 II : 小型防空壕
↓
居住部



入口部は居住部から見て左曲がりの L 字形で、幅 1m 前後、全長 3m の規模でした。四隅には、壁や屋根の支えとして柱用の角材が埋め込まれていました。また、掘り出した土砂を外に積上げて、光遮へいと爆風除けにしていたようです。

向山遺跡の探照灯跡

市内神明ヶ谷戸の向山遺跡が、開発事業の対象となる可能性が高いことから、平成 20 年 3 月、遺跡の状況を把握することを目的に、確認調査を実施しました。

縄文時代の遺跡として登録されていますが、調査に係る前から、“昭和 20 年の春頃、兵隊さんが探照灯(サーチライト)を設置していた”との目撃情報があり、土地の所有者である峯岸昭典さんは、“地中より銅線が発見された”とっていましたので、「戦争遺跡」の可能性もあるとの期待が寄せられていました。

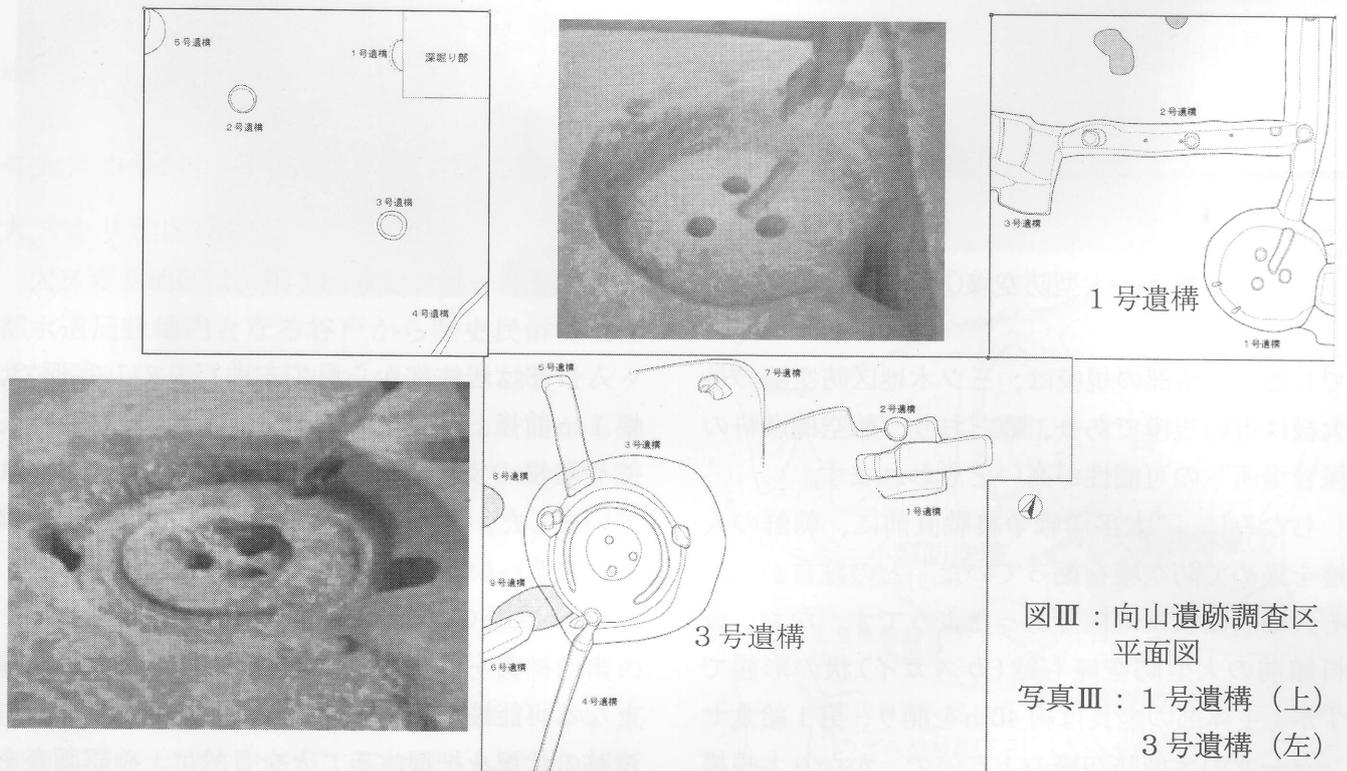
調査の結果、円形の土坑とそれをつなぐ溝などが確認され、分度器やガラス瓶びんが発見されました。円形の土坑は 2 基で、直径は 1 号遺構(図 III・写

真Ⅲ) が 3 m、3 号遺構 (図Ⅲ・写真Ⅲ) が 5 m、3 本の柱穴を持つことが特徴です。特に 3 号遺構は規模が大きく、柱穴が 2 重に構築されていてその間に溝が巡ることなどから、探照灯を設置するのにふさわしい施設ではないでしょうか。探照灯以外で地面に設置する機器は、管制器 (双眼鏡付の探照灯遠隔操作器)・聴音機 (聴音機) ですから、未調査区にも遺構が存在すると思われる、全容を把握する意味で今年度以降も調査を継続する予定です。なお、縄文時代の遺構としては、竪穴状遺構や小穴などが検出されています。

この探照灯設置の顛末は、神明ヶ谷戸の高橋和夫さんが良く記憶なさっていました。聞き取り調

査の結果を箇条書きにまとめてみました。

- ① 設置時期、昭和 20 年 4 月 9 日
- ② 撤退時期、昭和 20 年 8 月 26 日
- ③ 部隊人数、少尉を筆頭に 20 名弱
- ④ 神明社で寝泊り、食事は炊き出し。
- ⑤ 向山には、探照灯・測光機 (管制器か?)・集音器 (聴音器) を設置。
- ⑥ 発電機はトラックに積んで、神明社入口に置いていた。
- ⑦ 神明社入口から探照灯までは電気ケーブルで繋いでいたが、向山北の平地にトラックを移動した。
- ⑧ 通信兵が 1 名、神明社に待機していた。



図Ⅲ：向山遺跡調査区
平面図
写真Ⅲ：1号遺構 (上)
3号遺構 (左)

久保遺跡の大型地下坑

久保遺跡は旧石器時代後期の遺跡で、武蔵村山市内で最も古い遺跡のひとつです。平成 19 年 3 月の確認調査の際、大型地下坑 (図Ⅳ・写真Ⅳ) が発見されました。土地所有者である山田和夫さんのお母さんのお話を要約すると

「昭和 20 年の春に、兵隊さんが一日で掘上げ、脇の穴から出入りしていた。地面と同じ高さに土を被せてあったので何が入っているのかは

見ていない。終戦後すぐに中のものを運び出して、埋め戻していったようだ。」

とのことで、どのような施設かは不明です。

大型地下坑の平面形は、3.8×3.5mの主体部に1.5×1.1mの張出部を持つ凸形で、ローム面から平均3.2mの深さを測ります。耕作土が60cmほどありますので、実際の深さは4m近くでしょう。主体部上部の両側には、屋根材を支えるためのテラスが幅50cm・高さ90cmの規模で設けられてい

ます。底面は平坦で、張出部や主体部中央などに
 収納した機材の設置面と思われる $5 \times 30\text{cm}$ 程度
 の赤褐色化した硬化面こうかめんが確認されました。張出部
 手前には、方形で深さ 2m 以上の土坑が確認され、
 張出部と反対側の南壁には入口部と思われる横
 穴が穿たれています。

入口部は南壁に直角に掘り進んでいて、天井部
 近くは空洞でした。 4m ほど確認できましたが、
 その先は縦坑部分たてこうを埋めた土砂が流れ込んで
 いて詳細は不明です。幅 70cm ・高さ 1.7m の断面長
 方形で、天井部が崩れているだけでほとんど原形
 をとどめています。図IVには、点線で入口部を推
 定してみました。

埋め戻された土砂の中には、配電がいし碍子や布巻き
 銅線などが出土しています。特に、入口部内には
 布巻き銅線と配電碍子が繋がって確認されてお
 り、壁に配線してあった碍子が縦坑を埋め戻した
 際に剥がれ落ちた様子が伺えます。このことから、

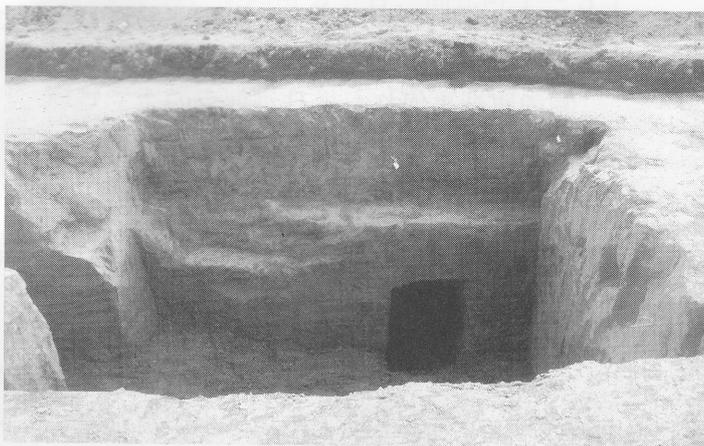
写真IV



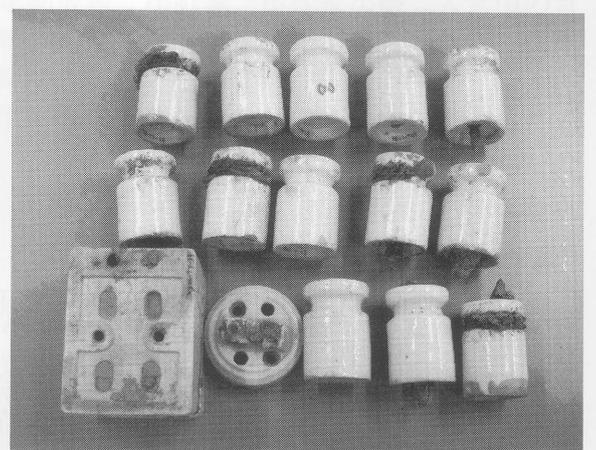
大型地下坑全景（東から望む）



テラスと張出部及び底面の土坑



南壁と入口部（北から望む）



出土した配電碍子



図IV：大型地下坑平面・断面図

この入口部を利用して、外の電信柱から電線を引き込んでいたことが判ります。以上のことを総合

して、この大型地下坑は「通信施設」ではないかと想像しています。

<武蔵村山の空爆被害>

武蔵村山への空爆は昭和 20 年 4 月 2 日と 4 日の 2 日ですが、村山国民学校日誌などによると、最初の警戒警報発令は昭和 19 年 5 月 20 日で、最初の空襲警報が昭和 19 年 11 月 1 日と記されています。そして、11 月以降は頻繁に警報が発令されるようになり、昭和 20 年 4 月から敗戦までは波状的に発令されている様子が見えます。

この記録による武蔵村山における最初の空爆被害は、昭和 20 年 2 月 19 日の「交換便帰途ニ高一男内野一夫空襲下機銃弾上膊骨折貫通銃創ヲ受ク」です。

そして、4 月 2 日午前 2 時過ぎ、最初の空爆を受けます。当時、赤坂国民学校の児童が疎開していた長圓寺にも爆撃被害があり、学寮日誌などの記録によりますと、“2 時半 B29 約 50 機空襲・長圓寺へ被弾、庫裏、学寮炊事場倒壊。本堂屋根も大穴が開き、学童全員は眞福寺へ避難”とあります。爆弾は、長圓寺から現第一中学校付近まではほぼ直線的に落とされていますが、主だった軍事施設もないこの場所を対象とした理由が不明です。

続く 4 月 4 日の空襲も午前 0 時半から 3 時半まで行われ、再び長圓寺周辺が被害を受け、4 人の方が亡くなっています。さらに、東京陸軍少年

飛行兵学校とその周辺も空爆され、生徒 4 名と村山出身の 18 歳の炊事班女性職員が殉死していません。その様子を学寮日誌から抜粋しますと

「長圓寺ハ爆風ヲ受ケ破損甚ダシク再興ノ見込ミ立タズ、周囲山地ニマデ時限爆弾投下セラレ、機銃掃射アリ、照明弾多数投下、真昼ノ如ク、学童身動キスルヲ出来ズ、全ク処置ナク六十有余人ノ生命ヲ預カリ言語ニ絶スル苦シミヲセリ、幸全員無事」

とあります。この空爆によって長圓寺に疎開していた赤坂国民学校児童は、眞福寺に疎開先を変更せざるを得なかったようです。

奇妙なことにこの日の三ツ木地区の被爆地点は 2 日とほとんど変わりはなく、長圓寺裏山のほか軽便鉄道軌道周辺や眞福寺周辺にも投下されていて、空爆範囲は 2 日より広がっています。三ツ木地区防空壕に代表される丘陵沿いの防空施設などを狙ったものではないでしょうか。

この 2 つの空襲については、故本木義治氏が、公式記録や聞き取り調査によってその詳細をまとめており、その内容を平成 5 年 3 月発行の「武蔵村山郷土の会会報 第 50 号 記念号」に掲載しています。以下に抜粋して再録しました。

米軍機の爆撃による村山村の被害について (抜粋)

三ツ木 本木義治

4 月 2 日の爆撃

① 帝都防空本部情報 (4 月 2 日)

- * 警報 警戒警報発令：2 時 0 分
- 空襲警報発令：2 時 23 分
- 空襲：2 時 32 分
- 空襲警報解除：3 時 55 分
- 警戒警報解除：4 時 5 分

* 来襲機数：B29 105 機。

* 投下弾：高性能弾 1018.8 トン。

② 帝都防空本部情報 第 154 号 (4 月 2 日 5 時 現在)

- 北多摩郡 1 東村山ニ敵 B29 一機墜落セリ
- 2 村山村横田駐在所付近ニ時限爆弾 10 数発落下被害調査中

③ 馬場地区被害状況 (聞き書き等による)

* 馬場地区に落とされた爆弾は殆どが時限爆弾であった。爆弾 37 発は不発弾 3 発を除き、落下後概ね 30 分位で炸裂したが 1 発は 4 月 8 日に爆発したものもあった。不発弾 2 発は桑畑だったが、現 1 中テニスコート辺、1 発は長圓寺庫裡裏何れも後日処理班の手で処理。

* 建物被害

住居＝全壊 4、半壊 1、爆風で傾いた家 3
物置＝全壊 1、蔵＝全壊 1

* 横田駐在所小塩信夫巡查巡察中爆発、首まで埋没、警防団に救出さる。

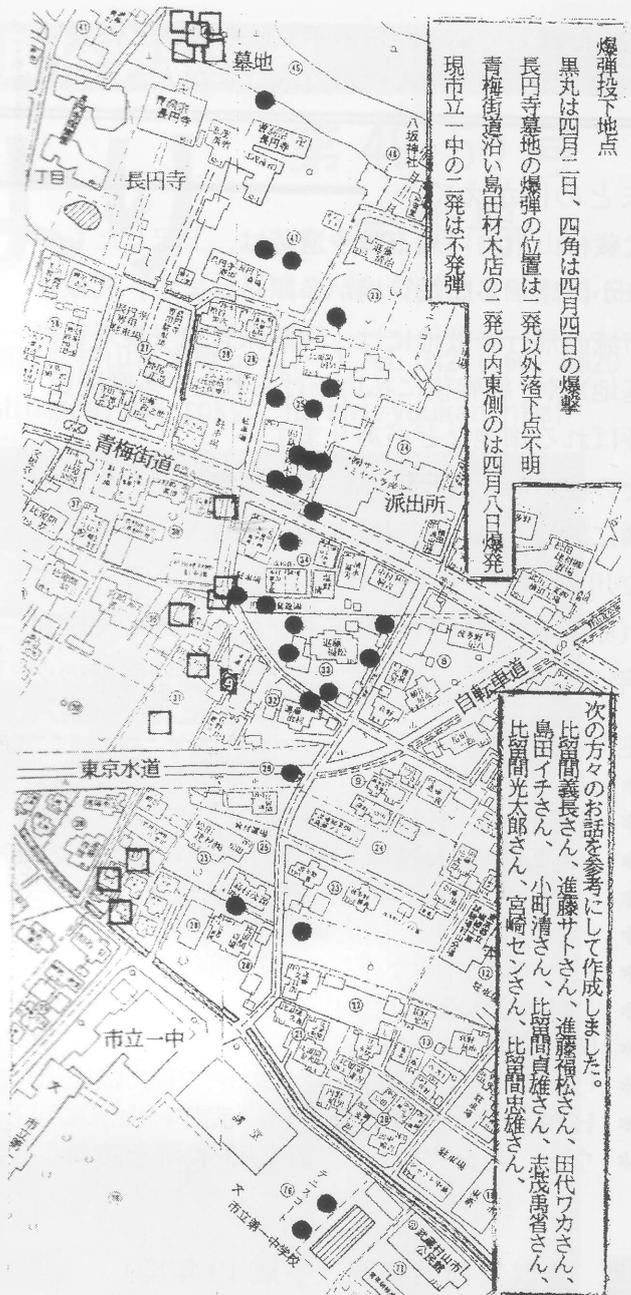
* 馬場の空襲について (談)

◎水道に落下した時限爆弾爆発によって大きな穴があき、地上からも水の流れがよく見えた。(比留間忠雄さん談)

- ◎島田材木店御主人応召中5発ばかり時限爆弾を落とされた。いつ爆発するかわからないので観音山に逃げた。(島田イチさん談)
- ◎時限爆弾(500キロ)防空壕入口はじめ近辺に4発ばかり落ちる。居宅は全壊、とよ店の家も傾いた。(比留間義長さん、進藤福松さん談)
- ◎提灯屋(小山さん)勝手口に落弾、全壊、檜原村へ転出、此の爆発のとき、横田駐在巡查生理めとなる。(比留間義長さん、進藤福松さん談)

4月4日の爆撃

- ① 帝都防空本部情報(昭和20年4月4日)
 - *警報 警戒警報発令: 12時30分
 - 空襲警報発令: 1時0分
 - 空襲: 1時12分
 - 空襲警報解除: 4時15分
 - 警戒警報解除: 4時25分
 - *来襲機数: B29 109機
 - *投下弾: 高性能弾 490.1トン、焼夷弾 12.7トン
- ② 警視庁警備総第112号(昭和20年4月4日)
 - *被害状況(工場関係)
 - ◎立川飛行機工場: 機械工場1棟全焼
 - ◎西川工場: 工場1棟全焼
 - ◎立川工作所: 工場1棟全焼
 - ◎日本通信工場: 寄宿舍及炊事場1棟全焼
 - ◎昭和飛行機工場: 飛行機1台焼失
 - ◎立川飛行工廠: 被害状況不明
 - *被害状況(その他)
 - ◎立川駅付近落下弾ニ因リ火災発生シ駅ノ北大部分、南地区一部分延焼中詳細不明
 - ◎中央線(富士見町三先)高架線切断、武蔵境間折返シ運転中
- ③ 警視庁空襲災害状況一覧表(「警察庁史」立川署)
 - *立川市(富士見町2・5丁目、羽衣町1丁目、錦町1丁目、柴崎町2丁目、高松町1~3丁目)
 - *村山村 *砂川村
 - *谷保村 *拝島村
 - *昭和町
- ④ 村山村馬場地区被害状況(聞き書き等による)
 - *投下された爆弾は瞬発爆弾であった。
 - *死傷者 小町ナヲさん(79歳)、勝己さん(8歳)、和江さん(9歳): 死亡
 - 小町浜吉さん: 肩に負傷
 - 清さん: 手に負傷
 - はるえさん: 尻に負傷



4月2日・4月4日の被弾地点

田代ワカさん: 足と腹部負傷
 定吉さん: 村山病院入院後死亡
 (ワカさんの義弟)

- *建物被害 小町家、田代家小破、入営中の宮崎さんのお勝手半壊、荻野さん宅半壊
- *馬場の空襲について(談)

◎空襲の日はみぞれが降って寒い晩だった。小町さんも私の家も防空壕入口へ落ちたので犠牲が多く出た。余りくわしい事はわからない。事故にあつてすぐ病院に運ばれてしまったから。(田代ワカさん談)

◎防空壕の入口に落ちた。側にあった道端の大きなケヤキが一瞬の間に消えてなくなっていた(小町清さん談)

◎爆弾の落ち始めはカラカラと音がし、やがてザ

一として落ちて来る。あの不気味な音が耳に残っている。時限爆弾積んだ飛行機は音が大きく、普

通爆弾積んだ飛行機の方が音が小さかった。(比留間貞雄さん談)

<まとめにかえて>

武蔵村山市内に残る戦争遺跡は、上記したもののほかに陸軍多摩飛行場が挙げられます。武蔵村山市域の飛行場敷地には、弾薬保管地(現米軍横田基地)や、終戦後に払い下げられた“多摩開墾”と呼ばれる畑地などがあります。

その他にも、所沢陸軍航空整備学校立川教育隊近隣に設置された小規模な通信基地や、日立航空機立川工場が空爆後に疎開した横田第四トンネル(赤坂トンネル)と第五トンネル、そして昭和20年2月17日、日立航空機立川工場空爆時のグ

ラマン墜落場所などがあります。

これらについても後世への記録保存は必要ですが、最も必要なことは、時間とともに消滅する当時の記憶についての聞き取り調査ではないかと考えています。空爆被害をはじめとして、大ヌカリ地区防空壕や向山遺跡・久保遺跡などは、その聞き取りによって詳細が判明した部分もありました。まだ知りえない事柄を含めた当時の様子を、より詳細に記録し後世に残すことが、世界恒久平和に繋がる一つではないでしょうか。

<主な参考文献>

- * 「陸軍少年飛行兵史」1983.3 少飛会
- * 「陸軍少年飛行兵史(補遺)」1985.10 少飛会
- * 「写真集/東大和市・武蔵村山市・瑞穂町の昭和史」1991.6 株式会社千秋社
- * 「多摩のあゆみ79号-特集 戦時下の多摩-」1995.5 たましん地域文化財団
- * 「武蔵村山市史 通史編下巻」2003.5 武蔵村山市
- * H15年度市民文化祭資料「昭和史展=戦争編=」2003.11 武蔵村山郷土の会
- * 「多摩のあゆみ119号-特集 戦時下の地域社会-」2005.8 たましん地域文化財団
- * 聞き取り資料「武蔵村山市を歩く」2006.7 榎崎由美
- * 「資料館だより第47号」2007.10 武蔵村山市教育委員会
- * H19年度市民文化祭資料「武蔵村山市に残る戦争遺跡」2007.11 武蔵村山郷土の会
- * ウォーキング資料「軍都立川-戦跡を訪ねる」2008.5 榎崎茂彌

資料館利用状況(平成19年度)

月	開館日数 (日)	利用者数 (人)	市 内		市 外	
			人数(人)	割合(%)	人数(人)	割合(%)
4	28	1,626 (42)	547 (42)	33.6 (100.0)	1,079 (0)	66.4 (0.0)
5	29	1,262 (92)	411 (65)	32.6 (70.7)	851 (27)	67.4 (29.3)
6	28	1,065 (192)	344 (126)	32.3 (65.6)	721 (66)	67.7 (34.4)
7	29	1,114 (114)	606 (108)	54.4 (94.7)	508 (6)	45.6 (5.3)
8	29	1,613 (7)	841 (0)	52.1 (0.0)	772 (7)	47.9 (100.0)
9	28	1,288 (0)	445 (0)	34.5 (0.0)	843 (0)	65.5 (0.0)
10	29	2,496 (0)	400 (0)	16.0 (72.8)	2,096 (0)	84.0 (27.2)
11	28	1,406 (283)	533 (206)	37.9 (72.8)	873 (77)	62.1 (27.2)
12	25	1,055 (104)	407 (65)	38.6 (0.0)	648 (39)	61.4 (37.5)
1	26	924 (69)	271 (0)	29.3 (0.0)	653 (69)	70.7 (100.0)
2	27	1,198 (341)	636 (315)	53.1 (92.4)	562 (26)	46.9 (7.6)
3	29	1,607 (277)	679 (223)	42.0 (80.5)	928 (54)	58.0 (19.5)
合計	335	16,654 (1,521)	6,120 (1,150)	36.7 (75.6)	10,534 (371)	63.3 (24.4)

※利用者(入館者)には団体を含み、()内は団体入館者数